

田部井 淳子

「限られた命の中で残せるのは、
自分だけの歴史。」

やりたいことをやって毎日を生きていきたいですね。」

「苑」この人に会いたい
登山家
田部井淳子さん (72 歳)

女性として世界で初めて世界最高峰エベレストおよび
7大陸最高峰の登頂を成し遂げ、現在は東日本大震
災の被災者支援活動にあたりながら山の魅力を伝え
続ける、田部井淳子さんにお話を伺った。



山に目覚めた原点の那須登山

田部井さんは1939年、福島県三春町で生まれた。桜、梅、桃の三つの春が訪れることが町名の由来の、緑と自然に囲まれた町である。小学校4年の時、担任の先生に連れられて行った栃木県の那須登山が、田部井さんの人生を左右する鮮烈な経験となった。

「緑の中で育ったので山といっても同じ緑だと思っていましたが、茶臼岳と朝

日岳に登って本当に驚きました。今まで見た山とまったく違っていました。火山口は砂と岩と硫黄に囲まれて、木も草もないし、川なのにお湯が流れていて、夏だから暑いと思ったら寒い。黒板で習った知識とはまったく違う世界を自分で歩いたというのが強烈な印象で、すごいところに来た！という思いが強かったです。

私は体が小さくて病弱だったものですが、体育や運動はまったく駄目でした。

でも山登りは競争ではないし選手交代もないので、どんなにゆっくりでも自分の足で歩かないと着かないというのがすごく良かったんですね。運動が苦手な私でも運動が得意な人と一緒に頂上に行けて、「私もみんなと一緒にだ」と思えたんです。先生が「ゆっくりでいいんだよ」って励ましてくれたのも心地良くて、みんなと一緒に頂上に立てたのが嬉しかった。麓から登ってきた道を頂上から見た時の「あそこから自分で歩いて来れたん





初めての登山。小学校4年生のとき、担任の渡辺俊太郎先生に連れられて。那須山系の茶臼岳と朝日岳に行ったときのもの。前列右が淳子。



社会人の山岳会で懸命に登っていたころ。20代。

だ」っていう達成感が忘れられなくて、もっと知らない所に行ってみたいと思ったのが原点だったと思いますね。今考えると、見たことのない風景を見て知らないことを知るといふあの体験がなかったら、山に目覚めることはなかったかもしれないと思います。」

コンプレックスと闘った学生時代

中学に上がってから扁桃腺が腫れて高熱を出したり、肺炎や肋膜炎になるなど病気がちで、体育は見学が多かったという田部井さん。それでもなんとか休学はせずに高校へ進学。当時は中学を卒業したら集団就職する人がほとんどという時代だった。山岳部は男子限定で入れず、高校時代はお兄さんと一緒に県内の山に登っていたという。昭和女子大学の入学

を機に上京した田部井さんを襲ったのは、田舎から来たというコンプレックスだった。

「テレビもない時代でしたから方言が強くて、田舎から来たって思われないうにしようって気持ちが強くなりました。そんな時、デパートで「これ、くない？」と言ってしまったんです。「あんな、福島かい？」と言われて、すごくショックを受けました。人と話をするのが嫌で、なるべく人と話さないようにしているうちにどんどん食べられなくなつて、ノイローゼみたいになつてしまったんです。それでいったん大学を休学して、福島に帰ったんですね。実家に2ヶ月いて、「このままでは絶対言葉も直らないし駄目だ」と思つて東京に戻ってきました。

その後、奥多摩に行く機会があつたん

です。すると三春と変わらないような姿のおばさんはいるし、クワやカマが庭に並んでいるし、「なんだ、東京って三春と変わらないな」と思つて気が楽になったんですね。「今まで登った山と東京の山はまったく違うな」と感じて、せっかく東京に来たんだから東京周辺の山に登ってみようと思ひました。本を買つて自分で計画して山に行くようになってからはだんだんコンプレックスを忘れていつて、今度はここに行きたいとかそういうことに夢中になっていきましたね。」

岩登りや氷登りに熱中した20代

大学時代卒業後は高校教師になる予定だった田部井さん。教育実習も楽しい経験になったが、教員試験を受ける直前に「大学を出ただけで人に物を教えていい



1975年5月16日エベレスト8848m頂上に立つ田部井（世界女性初）
写真提供 女子登攀クラブ



ベネズエラ最高峰ピコ・ボリバル登山中。



2009年インドのジャガツスクにて

のだろうか」という疑問が芽生え、受験をやめて他の就職を決めたという。初めて社会人の山岳会に入ったのは、日本物理学会ジャーナル編集部員として働き始めた1962年の4月。当時は男子限定の山岳会が多い中、やっと見つけた社会人山岳会だった。

「ほとんど男性ばかりで岩登りをしていく会でした。そこで初めて岩登りとか氷登りをしたのですが、山登りって足だけでなく手も使うんだって思いましたね（笑）。それからもっと夢中になって、22歳から29歳の間はほとんど毎週山に行っていました。いかに難しいルートを登れるか、自分の記録を伸ばすことに一生懸命でした。当時は谷川岳の難しいルートに行くには丹沢の沢を何本登らなくては

いけないとかここを登ってからとか、山岳会の中に厳しい規則がありました。岩場の登攀において最も難しいランクの6級というのがあって、そこまではかなり険しい道のりなんです。私はなんとにしても6級に行きたくて、それをクリアすることに熱中して、これは終わった、これは終わったって塗りつぶしていくような感じでしたね。あの頃は視野が狭くて「山へ行かない人は人間じゃない」ぐらいに思っていました（笑）。

山ってそこに行かなければ見られないものが見られることが一番のメリットだと思うんです。肉体的にはつらい時もありますけど、それをクリアした後の爽快感や普通の山登りでは味わえなかった岩登りの緊張感は、試験や面接など今まで

の人生のどの緊張にも勝っていたんです。命の危険がそこにあって、私が落ちたら相手も落ちてしまう。足元からキリキリするような何ともいえない緊張感というのは今まで感じたことがなかったですね。山以外のことにはほとんど目が行ってなくて、あの頃どんな映画や歌が流行っていたのかも知らなかったし、ほんとに世間知らずでした。」

ヒマラヤを皮切りに世界の山へ

それまで鎖国だったネパールのヒマラヤが解禁された1970年、29歳の時にアンナプルナIII峰に登頂。日本物理学会の仕事が続けていたが、会社の好意で8ヶ月の休暇を取り、月給が2〜3万

円の時代に90万円の費用をかけて向かう壮大な計画だった。このヒマラヤ登頂を皮切りに、女性として世界初のエベレスト、七大陸最高峰の登頂へとつながっていく。

「初めての海外ですからなにもかも驚きでした。あの頃は代理店なんてなかったですから、手続きや荷造り、船会社探し、通関の手続き、トラックの手配、荷物の引き出し、経費の計算、ボンベなどの危険物を運ぶ特別な証明を取りに走り回るなど、そういうことを全部自分たちでマネジメントしなければならなかったんです。ヒマラヤ登山というのは、単に体力や技術があるだけでは駄目なんだって身にしみてわかりましたね。だからベースキャンプに着いた時は、8割方終わった感じでした（笑）。

頂上には全員が行けるわけではないんです。過酷だなんて思いましたね。5000mを超えると高山病など具合の悪い人やけが人も出てきますから登れる人が少なくなりますし、最終的には隊長がその場で動ける人からアタックメンバーを決めるので、誰が登るかは直前までわからない。私はあまり高度の影響がなかったのですが、アタックメンバーに選ばれて運良く登れたわけですけど。選ばれなかった人も100万近くかけて来たわけです。文句も出たし、隊長もつらかったと思います。やっぱりヒマラヤってすごいなって。山のスケールもすごいけれど、

行くまでの過程が遥かなる道だなんて実感しました。

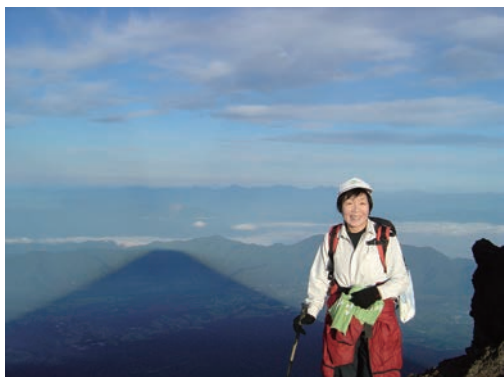
つらいのは、山で亡くなっていく人を見ることですね。植村直己さんもその一人です。年もほとんど同じですし、家と同じ沿線で電車でもよく一緒になったんです。私たちがエベレストに行く時も、山岳会のほとんどの男性から「女なんか行けるわけがない」とか「なんで行くんだ」とか厳しい声があったんですけど、その中で植村さんはすごく親切でした。

私たちの集会にも何度か来てくださって、「田部井さん、ここここだけ気を付ければ大丈夫だよ」って非常に具体的に、実践的なアドバイスをしてくれました。あれは忘れられないですね。」

東北を支援する応援プロジェクト

NPO法人日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（略称HATJ）の代表を務める田部井さん。この中に東





富士山にて。影富士です

interview 苑

北応援プロジェクトを立ち上げ、被災者の方たちを誘ってハイキングに出かけたり、「登って、泊って、買って帰ろう！」を合言葉に一般参加者を募って東北地方の登山ツアーを実施したり、チャリティバザーや講演会を行うなど、さまざまな被災者支援活動に取り組んでいる。

「福島は本当に大変で、ほとんど観光客が来なくなっちゃったんですね。東北に行っちゃって泊って食べて、おみやげをいっぱい買うのも応援のひとつだと思います。被災した避難所の方たちを誘ってハイキングに行くのは毎月続いています、参加者はシニア世代の方たちなんですけど、夏休みには震災で被災した東北の高校生を日本一の富士山に登ってもらおうと計画中です。日本人ならぜひ富士山に登ってほしいという思いがあるので、東北の高校生たちにも頂上に立つことで勇氣と元氣を得て、前へ進んでほしいなと心から願っています。7月には募金の一環として、東京の浜離宮朝日ホールで東北を応援する歌とトークの催しを企画しています。郡山女声合唱団、仙台在住の歌手さとう宗幸さんもお呼びして、なんと私も歌う予定です(笑)」

人生は8合目からおもしろい

田部井さんの著書の中に「人生は8合目からおもしろい」という本がある。この言葉は70代になってもやりたい



2009年3月15日『怖いもの知らずの女たち』出版記念コンサートにて

ことを実行し続ける田部井さんの人生感そのもの。東北支援の募金にも結び付いた「歌」は、子育てが終わって自由な時間ができたことがきっかけになったという。

「子育て中はどうしても子供中心になって、山には春休みとか夏休みとかお弁当のいらぬ日に行っちゃったね。でも子供が独立してからは、家に帰ってカレンダーを見なくても誘われてすぐ乗れるようになったんです。これはいい時代に入ったなと思ったのは60近くになってから。そこからどんどん広がつたんですね。女の山仲間と一緒にシャysonを習い始めて、ただ練習するのではなく目標を立てようということになって、なんと1年半後にはコンサートを開いたんです(笑)。「下素人が1年半でコンサートを開くなんて怖いもの知らずだよ」って言ったのが始まりで、コンサートのタイトルは「怖いもの知らずの女たち」。早いもので、怖いもの知らずのお姉さんたちと始めた催しは、7月の朝日ホールで5回目になります。

いま72歳ですが、私はまだまだ知らない所に行っちゃって、見て、知りたい。各国の最高峰に登ってみたいのですが、国連に加盟している193ヶ国のうちまだ60ヶ国しか登っていないし、日本にも行っていない所がたくさんあるんです。山は私にとって、知らないことを教えてくれる刺激の場ですね。見たこともない風景を見せてくれるし、山がなかったらどんなにつまらなかつただろうと思います。山に挑戦するって表現がありますけど、私は嫌いなんです。山は本来、動物が住んでいる場所ですから、挑戦とか征服ではなく「登らせてください」という気持ちなんです。

どんな人でも命には限りがあるから、限られた時間の中で残せるものといったら、私はお金とかではなく、やりたいと思って積み重ねてきた自分だけの歴史しかないと思っています。だから「あー、面白かった」って死んでいきたくない。やるだけやったら、生まれてきてよかったって思えるように、毎日を生きていきたいなと思います。」



「田部井淳子の 人生は8合目からおもしろい」(主婦と生活社)
人生8合目から始めたこと、人生を楽しむための知恵やヒントが満載